

「寅さん」 監督が求めた門前町の風情

写真は朝日 19 日朝刊「はじまりを歩く」。つい少しでも紹介したくなった。春。街が桜色に染まるころになると、あの四角い顔が懐かしくなる。映画「男はつらいよ」の主人公・車寅次郎（通称・寅さん）。

露天商のため、祭りや縁日とともに、北に南に日本各地を旅していた。「ほら、見な。あんな雲になりてえんだよ」。そう粋がっていたときもあったが、やはり故郷は恋しい。トランクを手に東京・葛飾柴又にふらりと帰ってくる。



実家は帝釈天参道にある団子屋。そこには、おいちゃんにおばちゃん、たった一人の妹さくらがいる。裏の印刷工場には、さくらの夫・博やタコ社長が働いている。そうそう、さくら夫婦の息子・満男、帝釈天の住職「御前様」に、寺男の「源公」も忘れちゃいけない。

それにしても、寅さんの故郷がどうして柴又になったのだろうか。1962(昭和 37)年秋だったという。東京大空襲の記録運動でも知られる作家・早乙女勝元さん(89)が暮していた葛飾区内の自宅を、山田洋次監督(90)が仕事で訪ねたことがきっかけだった。昼食時。「面白いところに案内しますよ」と早乙女さんが連れて行った先が、自宅から少し歩いた場所にある柴又だった。

戦災にあっていない門前町。2ヶ月に1度ある縁日「庚申」の日には参拝客が押し寄せるが、それ以外は静かだった。山田監督は回想する。「昔の東京の下町はこんな風だったのかなと思いましたね。『高木屋』という団子屋さんでおでんと茶飯を食べたのですが、満州で育った僕にしてはギョーザでも食べるのかなあと思っていた。ずいぶんと淡泊な昼ご飯でしたね」

6年後。喜劇役者として売れっ子だった渥美清さんを主演にした物語を製作しようとフジテレビの小林俊一プロデューサーが動く。テレビドラマの脚本家としても注目されていた山田監督に話をもちかけた。

問題は舞台だ。東京の門前町にすることは最初から決まっていた。だが浅草を始め、どこも戦後の開発が進んでいた。ふと思い出したのが以前、早乙女さんと一緒に歩いた柴又だった。「カ・ツ・シ・カ・シ・バ・マ・タ」。どことなく明るくローカルな響きがするの、山田監督にとってはうれしかった。

葛飾柴又を何回か訪ねたことがある。参道を歩き、高木屋さんで団子を食べたことを思い起こす。また訪ねてみたいものだ。

(2022年3月21日)